

茨城県行方郡麻生町

^{さが}
下り古墳群（1・2号墳）

発掘調査報告書

1999年10月

麻生町遺跡調査会

凡 例

- 1 本報告書は、茨城県行方郡麻生町島並 424-1、424-3 番地に所在する下り古墳群の土砂採取に伴い先行する記録保存の発掘調査報告書である。
- 1 本古墳は『前方後円墳』として分布調査で報告されている。
- 1 本古墳及び近くには古墳の存在が推察されていたが、墳丘を有するものは1号墳のみで、調査は平成11年7月15日から8月7日迄の19日間で、整理は8月9日から30日迄の21日間であった。
- 1 本古墳及び埋葬施設の調査は、麻生町遺跡調査会を組織し鹿行文化研究所の汀 安衛が担当した。
- 1 整理は、図面・トレースを前田京子と戸島和子が、挿図・版組を汀 昌子、横田奉隆、図版・原稿を汀 安衛が作成し、割り付けを戸島和子が行なった。
- 1 本報告書の縮尺は原則として遺構は 1/20、1/30 とし、水系レベルは図中に表示した。
- 1 本調査に際し次の方々に協力を受けた。記して感謝を表したい。
茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、麻生町教育委員会、藤崎土建・藤崎寿巳、横田泰隆、前田京子、戸島和子、清宮 久、根本武雄、菅谷益尚、大野あき、宮本陽子、羽生初枝、市村歌子、飯島イワエ、森山てい、永沢ミサエ、宮本 平
- 1 本調査の組織は次表のとおりである。

下り古墳群発掘調査会役員

役職	氏名	所 属	役職	氏名	所 属
会 長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長	理 事	藤崎寿巳	藤崎土建代表
副会長	辺田 弘	麻生町文化財保護審議会会長	〃	高木俊博	麻生町教育委員会生涯学習課長
理 事	宮内賢志	麻生町文化財保護審議会委員 (小高地区)	監 事	笠掛松雄	藤崎土建
〃	関口喜章	麻生町文化財保護審議会委員 (小高地区)	〃	小室 旭	麻生町出納室長
〃	平輪 一郎	麻生町文化財保護審議会専門 調査員	幹 事	額賀修一	麻生町教育委員会社会教育係長
〃	植田敏雄	麻生町文化財保護審議会専門 調査員	〃	石川真一	麻生町教育委員会主事
〃	汀 安衛	調査主任 鹿行文化研究所			

目 次

凡 例	
目 次	1
挿図目次	2
図版目次	2
I 遺跡の位置と環境	3
II 調査に至る経過と日誌	4
1. 調査に至る経過	4
2. 調査日誌	4
III 調査の概要	5
1. 1号墳の測量調査と墳丘プラン	7
2. 封土と土層	7
3. 埋葬施設	11
4. 2号墳	11
5. 土坑状遺構	13
IV 結 語	14

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置と環境	3
第 2 図	1号墳測量図と2号墳埋葬施設位置図	6
第 3 図	1号墳・2号墳位置図と調査区域	8
第 4 図	トレンチ位置図及び確認調査区	9
第 5 図	各トレンチと土層図及び後円頂部土層	10
第 6 図	2号墳埋葬施設と墳丘確認トレンチ	12
第 7 図	2号墳埋葬施設平面図・側面図・土層図掘り方平面図	13
第 8 図	1号土坑実測図	14

図 版 目 次

P L - 1	古墳から霞ヶ浦を望む、土砂採取場から見る1号墳後円部、調査前のお祓い
P L - 2	中央トレンチ（上）後円部（中）前方部（下）
P L - 3	墳頂部土層、トレンチ土層
P L - 4	調査終了と土坑遺構、くびれ部の状態、埋葬施設とトレンチ、埋葬施設掘り方
P L - 5	2号墳埋葬施設確認状態、蓋石投げ込み状態
P L - 6	蓋石投げ込み状態
P L - 7	蓋石投げ込み状態、底石と掘り方プランと土層
P L - 8	墳丘下の土坑状遺構と土層

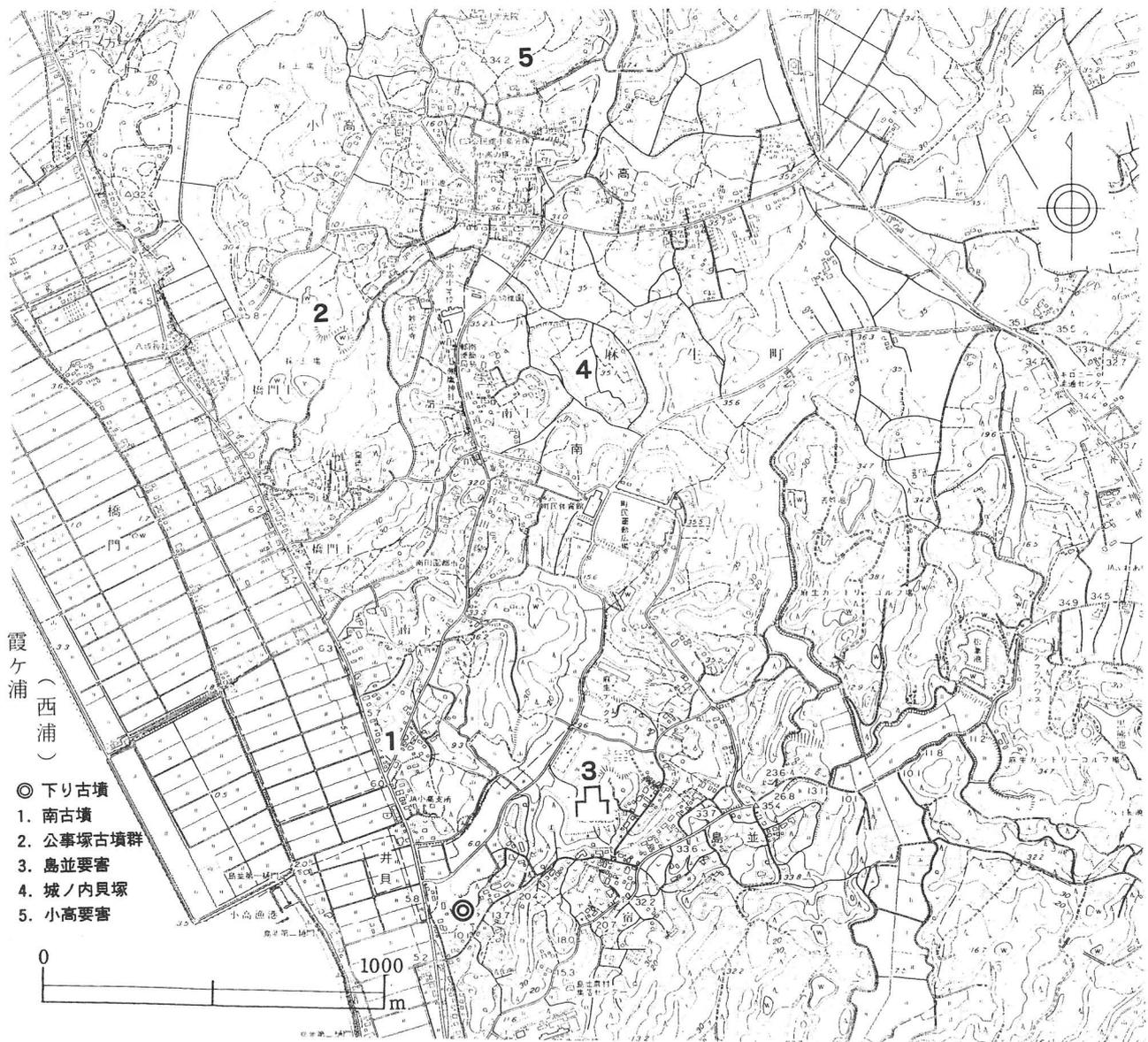
I 遺跡の位置と環境

本古墳は、茨城県行方郡麻生町大字島並 424-1 他に所在する。古墳の所在する台地は町民運動広場入口の国道の上、馬の背状台地先端部に占地し築造されていた。台地は、標高30~32m程を測り、麻生中学校の北側 400m に位置する。古墳からは霞ヶ浦中央部の三つ又沖を望み遙かに土浦入りの奥にビル群、阿見の街、美浦の台地を遠望し南側には佐原の市街を一望、西北側に紫峰筑波の山並み、遠く日光連山を遠望する景勝の地に占地する。台地北側には開析谷が 1.5km 程入り、水田に利用されている。眼下の沖積地は水田として利用され、遙かに玉造・小川町方面に続く。

(第1図)

本『古墳群』は、このような自然環境に恵まれた台地上に占地し北側には1の『南古墳』大字橋門には2の『公事塚古墳群』が所在したが土砂採取のため記録保存されている。3は『島並要害』、4は『城ノ内貝塚』、5は『小高要害』など遺跡の多い地域である。

その他、周辺には縄文、弥生、古墳時代の多くの遺跡が所在している。また本『古墳』の周辺



第1図 遺跡の位置と環境

にも多くの遺跡が見られる。

Ⅱ 調査に至る経過と日誌

1. 調査に至る経過

平成 11 年

- 3 月 25 日 藤崎土建代表藤崎寿巳氏から麻生町大字島並字下り地内における土採取事業にかかる埋蔵文化財の所在の有無の照会が提出される。
- 3 月 29 日 照会地の所在確認調査を行う。
- 3 月 30 日 照会地は、周知の遺跡（下り古墳群）が存在するため、遺跡の取り扱いについての協議を要望する。
- 6 月 17 日 文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届け出をする。
- 6 月 28 日 下り古墳群発掘調査会が発足する。

2. 調査日誌

本『古墳群』は、前述のとおり土砂採取工事等に依り記録保存される事となり、7月15日から調査に入った。立ち木の伐採、草刈り等調査以前の作業がありこれらをかたずけてからの調査になった。

前方部の一部は畑として一部変形している。後円部左側に抜根跡と思われる変形部が見られる他は、かなり良好な遺存状態と推察された。以下、調査日誌で経過を述べたい。

平成 11 年

- 7 月 9 日 遺跡の調査区の切りがつきテント・道具の搬入調査に備える。
- 7 月 15 日 本日から調査を開始、高橋僧正にお疲れをお願いする。草刈り、立ち木伐さい。墳丘の測量開始、一部草刈り、立ち木伐さい、安全に配慮。
トレンチ設定し、調査を開始する。後円部墳頂部に方形の調査区を設定測量調査から埋葬施設の存在が推察された。遺物は検出されない。
- 7 月 16 日 暑く、人手が少ない。墳頂部調査、遺構は検出されず。2回下げる。約80cm。降雨の為3時に作業中止とする。後円部にトレンチを設定調査。
- 7 月 17 日 墳頂部掘り下げ、埋葬施設確認出来ず。トレンチ調査。
後円部南側の裾部は家屋、立ち木のため調査断念。
- 7 月 19 日 1区全域を調査、くびれ部トレンチ調査。土層図作成。
一部、馬の背台地を盛り土し平坦部を確保し築造の可能性あり。土質は大半が砂質粘土と黄橙砂を用い、俗に『かな岩』を混入している。
- 7 月 21 日 中央、くびれ部、前方部の各トレンチの調査を進める。前方部に周溝検出出来ず。畑の寄せの溝のみ。毎日酷暑が続く。
- 7 月 22 日 本日より3人ふえる。後円部中央には埋葬施設確認出来ず。僅かに雲母片岩がトレンチから検出される。予想以上に、かな岩多い。

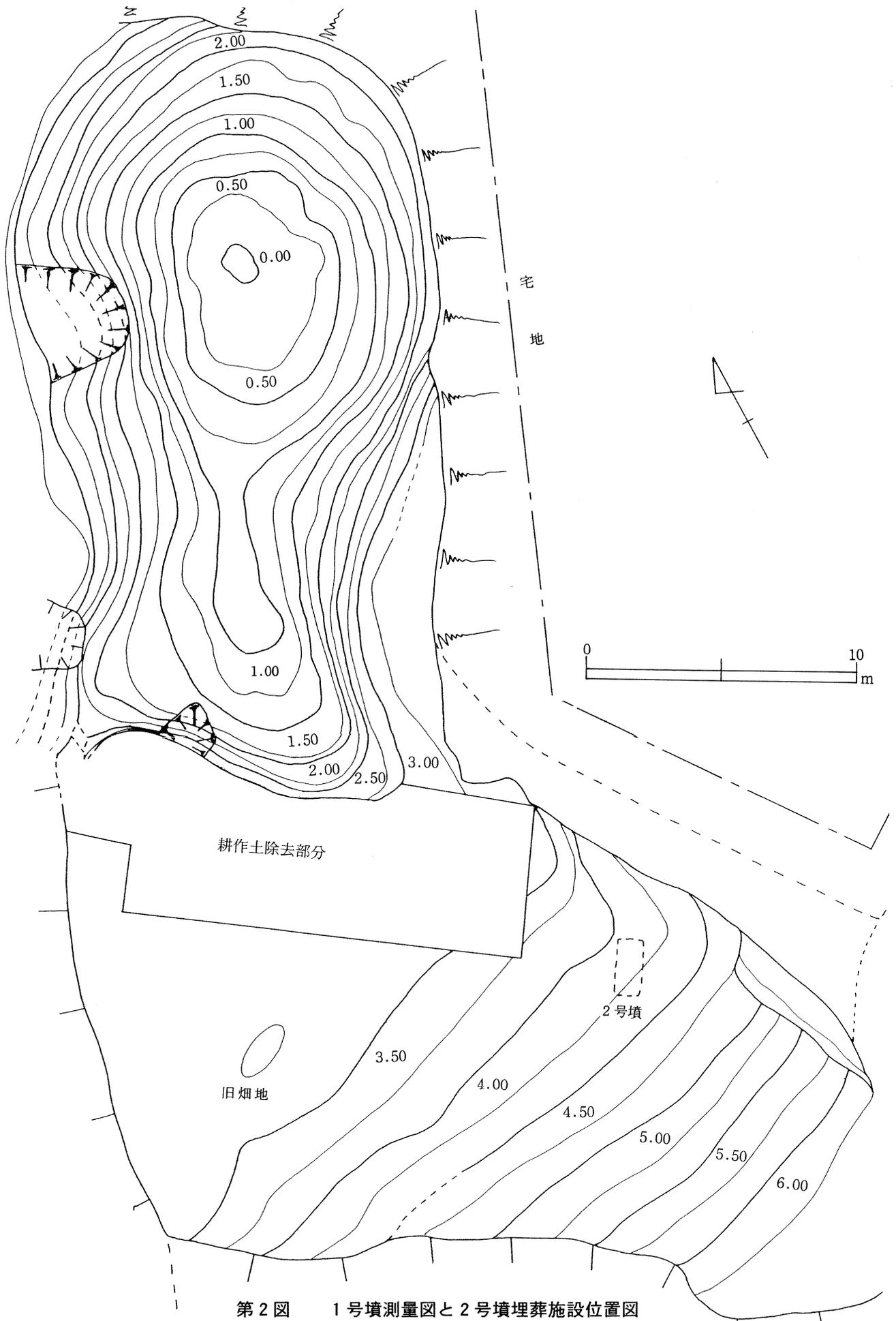
- 7月23日 中央部トレンチ地山層に下げる。白色粘土層が見られる。最下層。裾部は白色粘土をクサビ状に積み上げる。
- 7月24日 雨天のため現場休みとする。事務所で図面の整理作業を進め、残した部分、必要な図面の検討作業。
- 7月26日 前方部の土層図作成。括れ部、前方部端。後円部1区、2区の残り部分の除去。土層作図終了。
- 7月27日 毎日酷暑が続く。前方部。後円部の封土除去。埋葬施設存在せず。周溝存在せず。役場に匿名で畑部分に埋葬施設あるとの電話あり。
- 7月28日 封土除去後の遺構確認作業を進める。古墳南側の畑の一部に埋葬施設らしき物あり。草刈り実施、雲母片岩の箱式石棺の上端の一部検出。
- 7月29日 ボーリング探査の結果、蓋石を除き現位置を止め完全に遺存することが判明。調査開始。
- 7月30日 1号墳には埋葬施設存在せず。2号墳の埋葬施設調査に全力。蓋石は全て内部に投げ込みで遺存していた。蓋石を一枚ずつ取り上げる。
- 7月31日 1号墳の後円部下に粘土張りの楕円形部あり。調査開始する。2号墳掘り方調査。蓋石全て引き上げ終了。
- 8月2日 1号墳下の土坑状遺構、土層図作成。掘り方調査、周辺の周溝確認作業を進めるが古墳のプランは不明。
- 8月3日 2号墳の土層図作成。内部から骨粉状の物検出、その他副葬品、遺体、等皆無。全て黄橙色の砂が埋積？していた。
- 8月7日 本日で作業終了とした。側石、妻石、底石に番号を付して引き上げ。道具、テントの引き上げ。4時より被葬者を偲び簡素に打ち上げを行なう。
以上が調査の概要である。

Ⅲ 調査の概要

はじめに

下り古墳は、一部の人々は古墳群か？、との捉え方があった。しかし踏査を行い肯定、否定する考古学徒はいなかったと理解され今日に至った。この度の前方後円墳を調査することに依って周辺の確認を進めたところ、少なくとも周辺には4基の古墳が存在していたと推察出来る。

麻生町発行の地図から地形を観察すれば調査を行なった古墳を『1号墳』と仮称し東側に円墳状の高まりが見られ、西側の台地端部に一部土砂採取により崩落した円墳状高まり、そして1号墳の南側5mの斜面には埋葬施設が確認され、古墳が存在した。これらを整理すれば周辺には都合4基の古墳が存在していたと推察される。依って本古墳は古墳群と呼称し、前方後円墳を1号墳とし、埋葬施設の確認された古墳を2号墳、土砂採取で欠失している西側の台地端部の古墳を3号墳、煙滅した古墳を4号墳とし述べていきたい。



第2図 1号墳測量図と2号墳埋葬施設位置図

1. 1号墳の測量調査と墳丘プラン（第2図）

調査は立ち木の伐採、草刈り作業を進め測量調査が行なえる状態にし、古墳の現状の把握に努めた。

古墳西側の前方部端には攪乱状の凹が観察され裾部は畑地の為一部変形している。後円部左側には抜根状の凹が見られ、コンターがかなり湾曲する。主軸はN-40-E。

測量調査は、後円部墳頂を0mとし25cmコンターで行なった。後円部はやや平坦部状を呈して25cmが巡りやや長円形状、50cmでもほぼ同様に狭い間隔で一周する。後円部を巡るコンターは75cmで、これも50cmをほぼ同間隔で一周し、本コンターで前方部部分はない。1mで前方部迄伸びる。幅狭く天狗の鼻状に遺存する。1.25mも同様に巡り北、東、南側ではほぼ等間隔で、攪乱も無く、-2mまで円形状にきれいに半周する。西側では1.50mで攪乱部の為一部変形し、-3mラインまで変則的である。前方部では、2.00mで前方部のプランが明確化し隅部が角張り、張り出すプラン。その他古墳を一周する最終コンターは-2.5mで、南側では-2mで括れ部で観察される。その他は、畑地、崩落、削平、攪乱等により変形し全容は把握できない。

測量調査の結果本古墳は後円部高さ3m、前方部高さ2mで全長約29mの前方後円墳と推定される。古墳は、本域の古墳と特別な差異をもつものではない。後円部は円形、前方部は隅部が張り出す形態、前方部は端部に向かって下がり気味でやや古い様相を呈していた。相対的には後期古墳の類例に入る。測量調査から時期は、六世紀中期～七世紀初頭と推定される。測量、草刈り等に於いては埴輪、葺き石、雲母片岩は確認されなかった。

なお2号墳は10年程前まで煙草畑として耕作され使用されていた。そのおり発見し内部の副葬品は全て取り上げたと言う。なだらかに傾斜を示し古墳、墳丘の形跡はない。

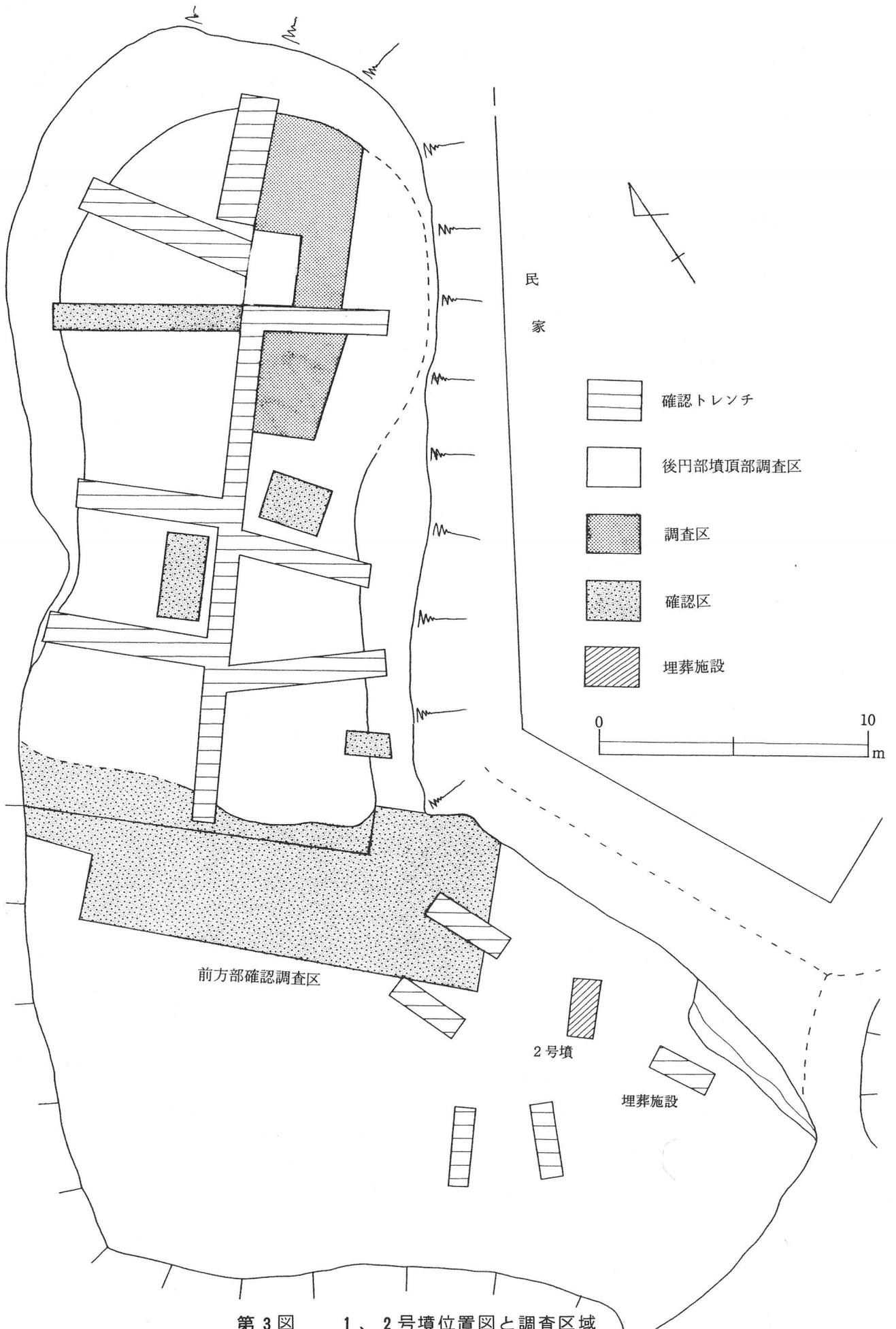
2. 封土と土層（第3図、4図）

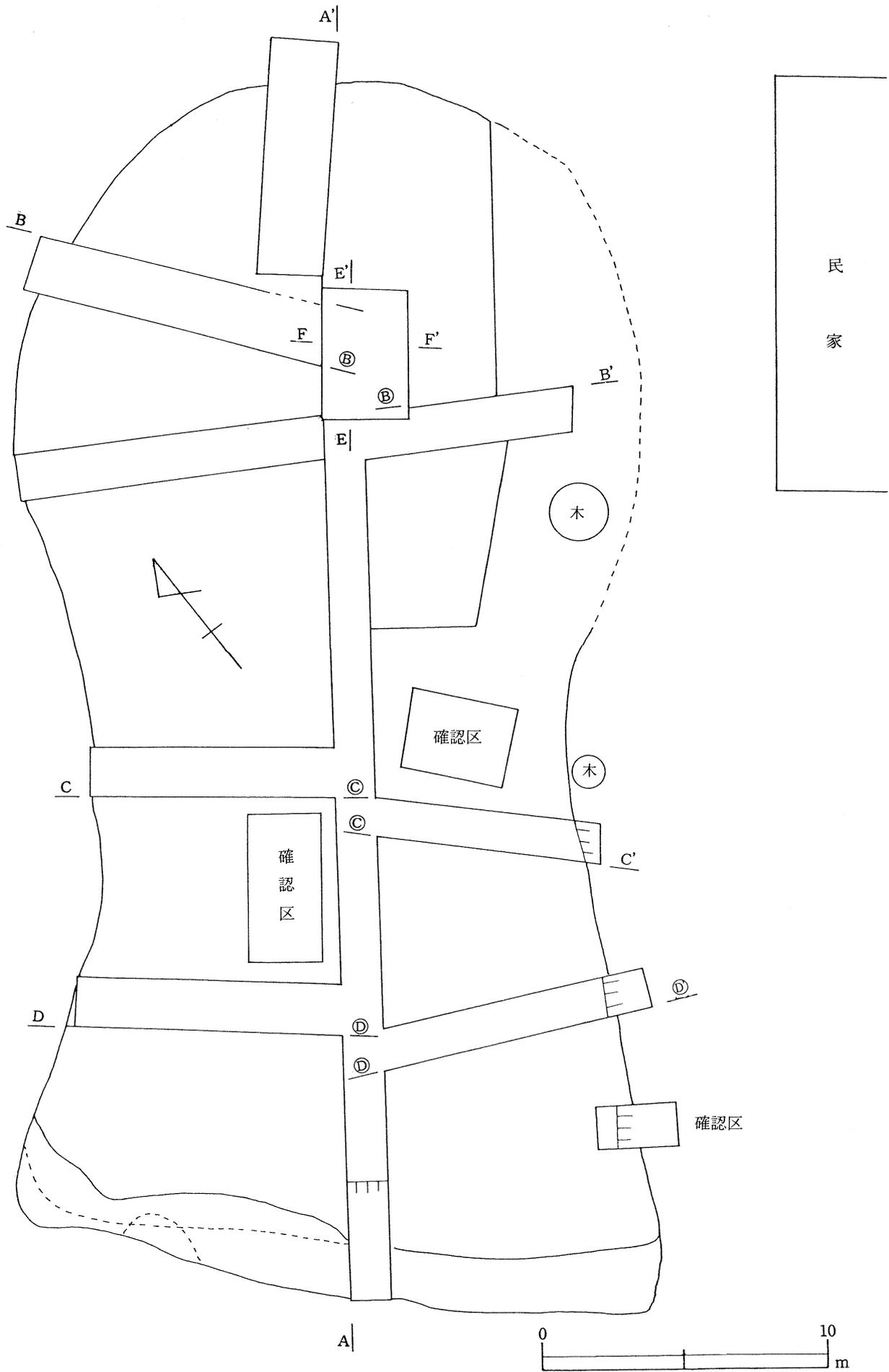
調査はトレンチを主体とし、後円部墳頂部に長方形の調査区を設定、下層まで掘り下げ、後円部は4区に分割し、1区、2区は全体の7割を調査したが埋葬施設は確認できなかった。墳丘中央部には全長3m程のトレンチを設定し封土の観察と前方部と後円部の関係、墳丘構築状態の観察、前方部の周溝、畑との関係、隣接する埋葬施設との関係等を考慮し畑部分はかなり大きく調査区を設けた。

その他、立ち木の状態、切り株等は考慮し肋骨状に中央トレンチに交わる4本のトレンチを設定し封土土層、墳丘規模、プラン、埋葬施設の確認等に配慮し調査を進めた。

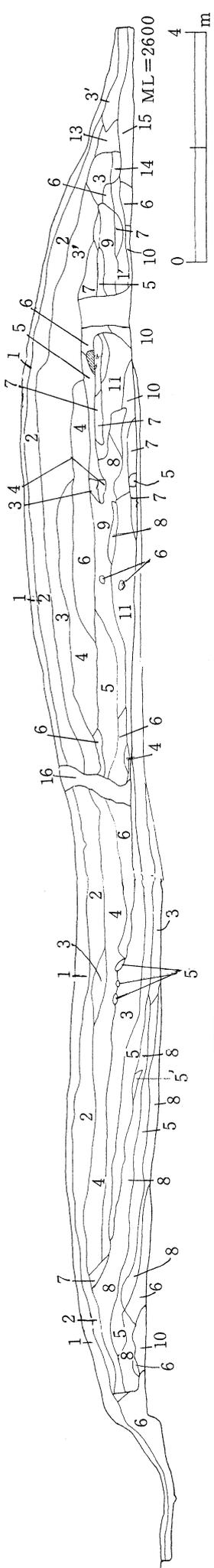
封土土層は、東西中央トレンチは6、8層の粘土を多量に含むクサビ状に積み崩落を防ぐ前方部と6、7、13、15層のクサビ状、水平等複雑にそれぞれの粘土を用い崩落、欠失を防ぐために種々の工夫が見られ当時の土木技術の高さが看過される。中央部は水平的な層序を示し黄褐色、淡い黄白色、橙黄色等の砂を多量に含む層が大半を占める。しかし4層のように、砂質粘土を含む層もあつて状に見られ綿密な土質の計算がなされて構築されている。

東西のトレンチも同様で端部では砂質粘土、黒褐色粘土等をクサビ状に積み上げて崩落、欠失を防いでいる。これらから若干の流れはあるが、旧状を良く残していると理解される。遺存状態は良好と推察される。



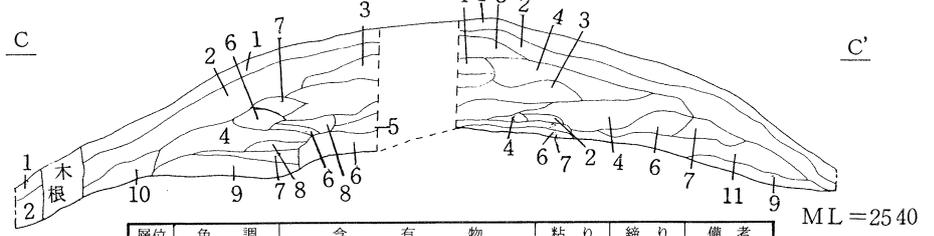
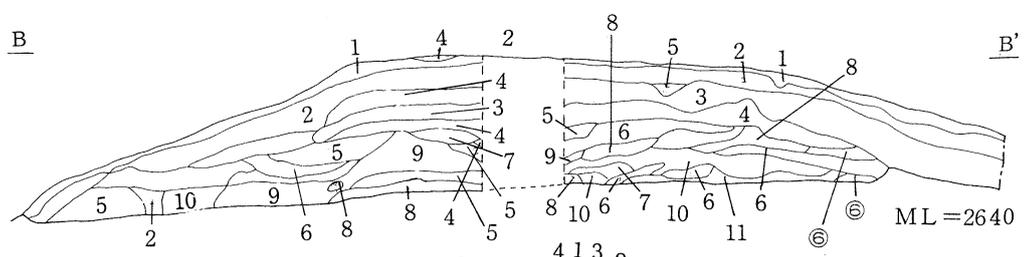


第 4 図 トレンチ位置図及び確認調査区

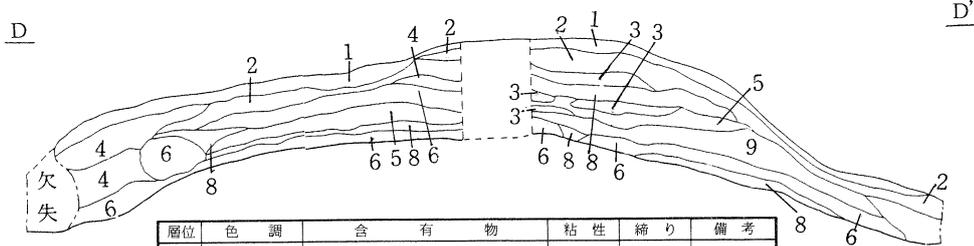


層位	色調	含有物	粘り	締り	備考
1	にぶい黄褐色	砂質粘土少量	強	い	
2	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
3	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
4	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
5	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
6	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
7	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
8	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
9	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
10	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
11	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
12	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
13	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
14	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
15	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
16	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	

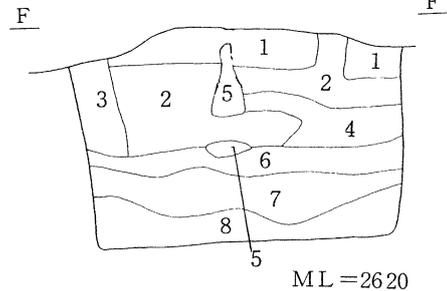
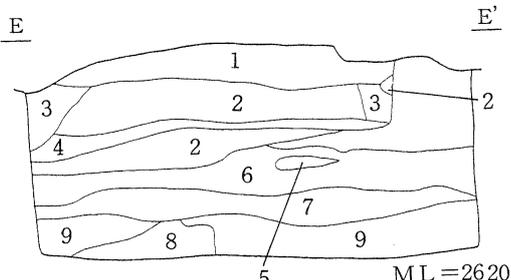
層位	色調	含有物	粘り	締り	備考
1	黒褐色	砂多量	強	い	
2	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
3	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
4	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
5	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
6	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
7	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	
8	黄褐色	砂質粘土多量	強	い	



層位	色調	含有物	粘り	締り	備考
1		別図と同一			
2					
3	暗褐色	粘土やや多量	強	い	強
4	にぶい黄褐色	二酸化鉄ブロック、白褐色砂質粘土	"	"	"
5	白褐色	暗褐色砂質粘土少量	やや有り	やや有り	やや有り
6	暗褐色	黒色、白褐色粘土	強	い	強
7	暗い黄褐色	黒色粘土、二酸化鉄ブロック混入	弱	い	弱
8	白褐色	暗褐色砂質粘土、二酸化鉄小ブロック少量	やや有り	やや有り	黄褐色砂やや多量
9	暗い黄褐色	粘土、二酸化鉄小ブロック多量	"	"	"
10	淡い黄褐色	白褐色粘土やや多量、黄砂少量	"	"	"
8'		8よりはやや黄褐砂少量、粘土少ない	"	"	"



層位	色調	含有物	粘性	締り	備考
1					
2					
3	にぶい黄褐色	黄砂多量	弱	い	弱
4	暗褐色	灰褐色砂質粘土少量	やや有り	やや有り	
5	黄褐色	黒色小ブロック多量	"	強	い
6	にぶい灰褐色	灰褐色砂質粘土多量	強	い	"
7	やや灰色がかった黒褐色	灰黒褐色砂質粘土多量	"	"	
8	暗褐色	砂質粘土少量	やや有り	やや有り	
9	暗褐色	灰褐色砂質粘土多量	"	"	
10	暗褐色	灰褐色砂質粘土多量	強	い	強
11	黄褐色	砂質粘土ブロック少量	やや有り	やや有り	
		黄褐砂少量	"	"	



層位	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	にぶい黄褐色	黒色ブロック少量(黒色は二酸化鉄カタマリ)、黄色砂少量	なし	強	い
2	白色砂	黒色ブロック少量	弱	い	やや有り
3	白色砂	砂多量	"	なし	
4	にぶい黄褐色	黒色ブロック大やや多量	"	強	い
5	白褐色	粘土質少量	やや有り	やや有り	
6	黄褐色	砂多量	弱	い	弱
7	にぶい黒褐色	黒色ブロック黄土色砂少量	"	強	い
8	にぶい暗褐色	砂質粘土黄土色砂少量	やや有り	やや有り	
9	にぶい黄褐色	黄土色砂多量	"	弱	い

第5図 各トレンチと土層図及び後円頂部土層

特別な掘り込み等は認められず、トレンチ、調査区では埋葬施設は検出されなかった。一部抜根の跡と畑の耕作欠失が見られたのみであった。

土層は部分的に『かな岩』と呼ばれる二酸化鉄の固まりが岩のように散在し認められた。特別な位置関係は認められない。あくまでも後円部封土中に散在的で認められた。

これらから本墳は全長 29 m、後円部径 16 m、前方部幅 10 m、括れ部幅 8 m の規模が推定された。

3. 埋葬施設

本古墳では 3、4 図でも判るに埋葬施設が検出されなかった。いわば空墓であった。本古墳の土層を検討してもあとから、墳丘構築後埋葬施設を設置した様な土層は認められず、少なくとも墳丘構築以前に施設を埋設しなければ存在しない。最後に重機により地山層の削平を行なったが円形土坑が 1 基検出された。調査の範囲においては埋葬施設は最初から存在しないと断定した。小生自身、今日まで多くの古墳を調査してきたが空墓は、今回が初めての調査で戸惑いを感じた。

4. 2 号 墳 （第 3、4、5 図）

本古墳は、前述のとおり 1 号前方後円墳、前方部の南側 8 m に埋葬施設が確認された古墳で墳丘は存在しない。確認出来なかった。以前畑として利用され削平されたと推察される。

現状は 3 図に見られるとおりかなりの傾斜をもち古墳の存在は推察出来なかった。しかし草刈り、1 号前方部の調査、通報等で確認調査を行なったところ雲母片岩板石による埋葬施設が確認され調査を進めた。

墳丘は、前述のとおり皆無で僅かに埋葬施設部分が石の為耕作や土砂の流失が避けられ平坦であった。草刈りを行ない、初めて判明した。

埋葬施設の位置確認のため 5 ケ所のトレンチを設定したが周溝は確認出来ず、墳丘プラン、規模、埋葬施設の位置等はまったく不明である。施設は地山層を掘り込み埋設しており、これらから推察すれば後期末の典型的な『変則的』古墳に分類される。

地形方角から円墳の南側裾部に位置し求心方向では無く、平行に設計、位置していたと思われるが、これは調査した者の感覚で肯定すべき資料は皆無に近い。唯一根拠に近いものは地形のみであり、これも耕作により変形は免れない。発見者の談話は把握できなかった。

埋葬施設は、雲母片岩板石組合わせの箱式石棺で蓋石は全て除去され内部へ投げ込まれ旧状は把握出来ない。推測乍ら投げ込み状態から北側が一番上か？。

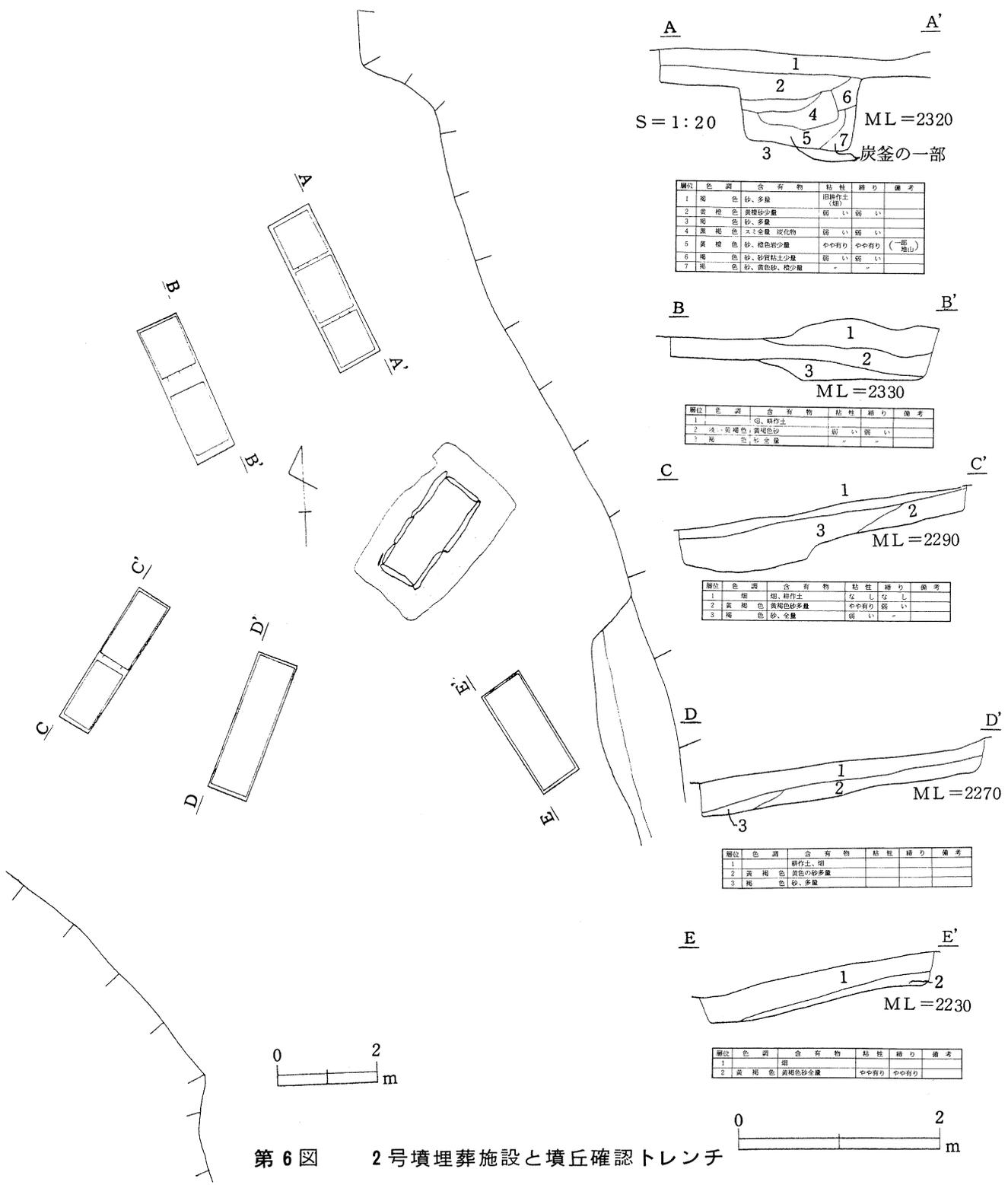
埋積土は、全て畑の黄褐色で発見時かなり綿密に副葬品の探索が行なわれたと考えられ、全ての土を篩を通したが副葬品は皆無であった。

石棺は、第 7 図のとおり側石が南側で 2 枚、北側で 3 枚、妻石東西各 1 枚ずつ計 2 枚、蓋石 4 枚の合計 11 枚と底石 5 枚で構築されていた。主軸を N-43°-E に置き、長さは外法 2.6 m、幅は内法で 72 cm 前後、深さは 65 cm 前後であった。各石共ほぼ垂直で旧状を呈していた。東側の妻石が 10° 程内傾していた。

掘り方は、長さ 3.1 m、幅 1.7 ~ 1.75 m 前後の長方形を呈する。深さ 70cm 前後を計測する。各石共 10 ~ 20cm 程の掘り込みをもち底部に小石を敷き安定を図っている。箱底は地山を平坦にし水平に石を並べただけの簡素な形態。

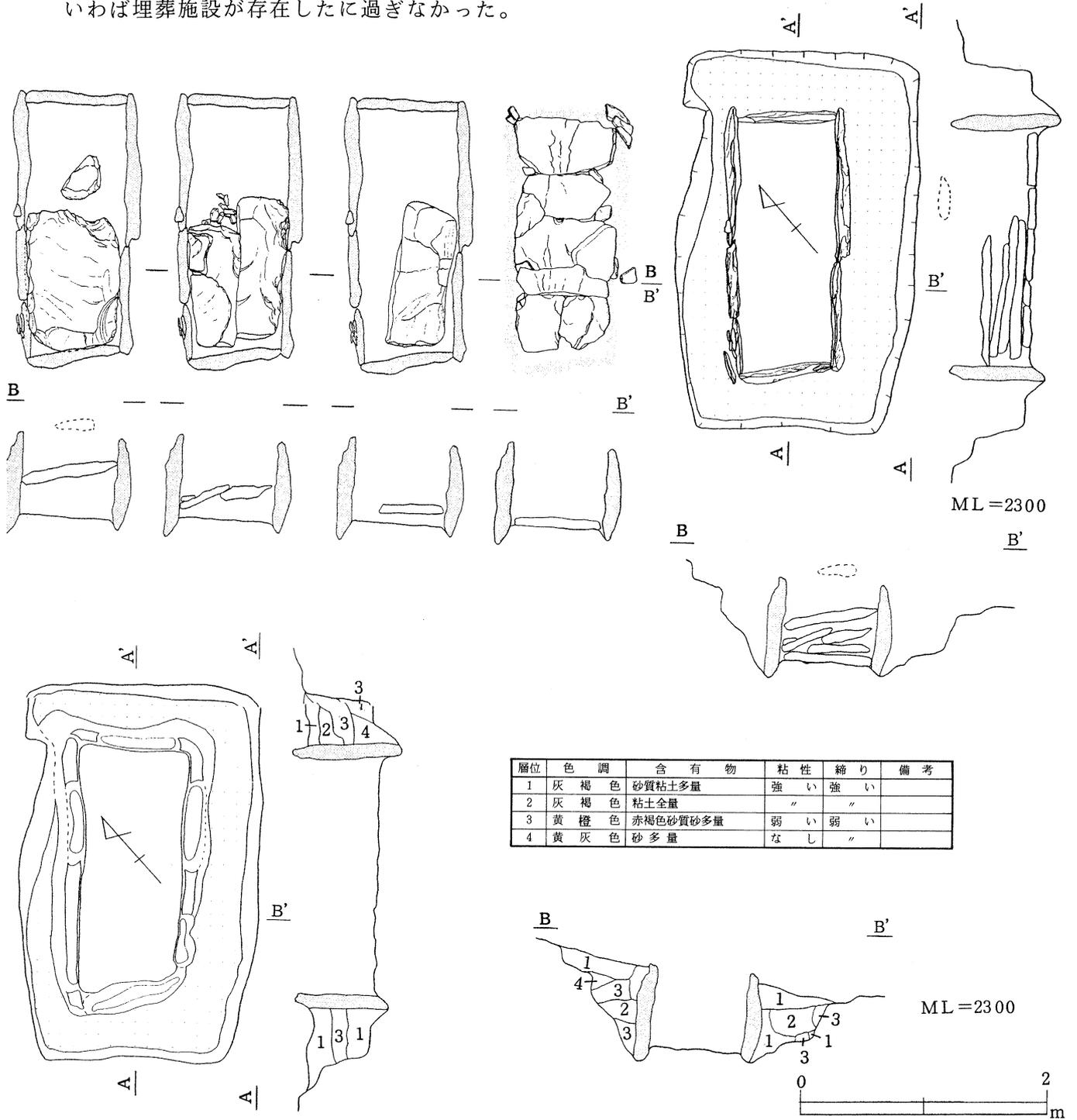
土層は、4層で1層は灰褐色粘土多量、2層は全量、3層は黄橙色で赤褐色砂質が多量で一部地山を掘り込む。上部は、耕作攪乱のため定かではない。蓋石部分の粘土は、確認出来なかった。それほど傾斜がきつく耕作頻度が多いと推察する。

副葬品は、前述のとおり皆無で伝承によれば直刀が出土していると言われているが、出土状態、保管者、その他の副葬品、人骨等は不明である。



第 6 図 2号墳埋葬施設と墳丘確認トレンチ

いわば埋葬施設が存在したに過ぎなかった。



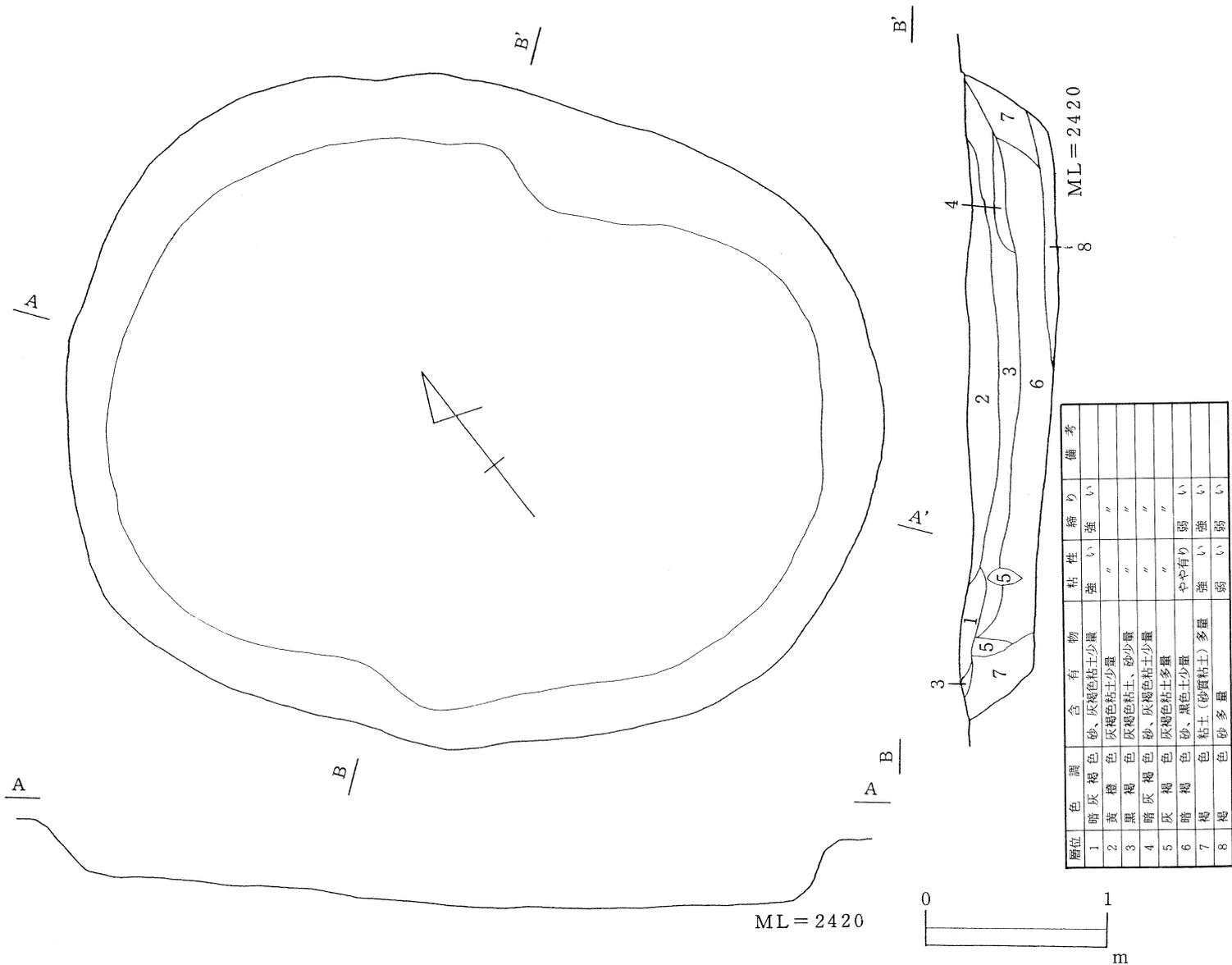
第7図 2号墳埋葬施設平面図・土層図・掘り方平面図

5. 土坑状遺構 (第8図)

本遺構は、後円部の下部に位置し検出された。封土を除去し下部の掘り込み、遺構の存在を確認するため調査して検出された。遺構は東西にやや長く4.5mを測り、南北3.75mの楕円形状プランで深さは45cm前後で底部は、南側がやや低い。周囲は砂質の地山層で締り、粘性は皆無である。

覆土は8層で、1層は砂、灰褐色粘土を含み粘性、締りは強い。5層まで同様で2、3層は水平状で版築状、6層中から弥生時代末の附加条2種の縄をもつ破片が1片出土している。本遺構

の性格は把握できなかった。時期も古墳以前と推定する。



第8図 1号土坑実測図

IV 結語

本古墳は、最初は単独墳として推察していたが調査を進めたところ、4基からなる古墳群であった。しかし、2基の古墳は土砂採取で煙滅や欠失等、1基は耕作のため埋葬施設のみ存在、1号前方後円墳は調査の結果は空墓で埋葬施設は検出出来なかった。

土砂採取で煙滅する調査区域は1号、2号のみであった。以下これらの古墳をまとめ結語としたい。

1号前方後円墳は全長27m、後円部径13m前後、前方部幅約14m、長さ14m、後円部高さ3m、前方部高さ2mの小型の後期初頭の古墳である。前方部はやや鋭角的に開き、後円部径と長さが近値をもつ、しかし高さは後円部から流れて独立したコンターはない。これらはやや古手の名残で、後円部墳頂にもやや平坦部状部分が見られる。括れ部幅は10mで墳丘プランからは6世紀末から七世

紀初頭の時期が推察される。

埋葬施設は確認出来ず存在しなかった？と推定した。いわゆる『空墓』である。筆者は、今日まで幾多の古墳を調査してきたが空墓は、今回が初めてであり、その点大変勉強となった、と同時に勉強不足を痛感した。本古墳の封土からは墳丘構築後に埋葬施設を埋設した様相はない。したがって墳丘築造以前に埋葬施設を構築しなければ存在の可能性はない。したがって封土調査後地山層の調査を行なったが埋葬施設は確認出来無かった。そういう意味では『空墓』と断定せざるを得ない。

2号墳は、墳丘は無く埋葬施設のみで確認、検出された。周溝の確認を行い墳丘プランの確認に努めたが確定出来なかった。各トレンチでは検出されない。地形的な問題と畑の耕作の為の変形で結論はでない。

しいて推論すれば、円墳で埋葬施設の地山掘り込みから古墳時代後期末、所謂変則的古墳の類例に該当し墳丘平行の埋葬位置？と考える。

副葬品は、皆無で時期は特定出来ない。直刀が出土したと伝承されるが、その他の副葬品については話はない。勿論人骨の有無についての話もない。

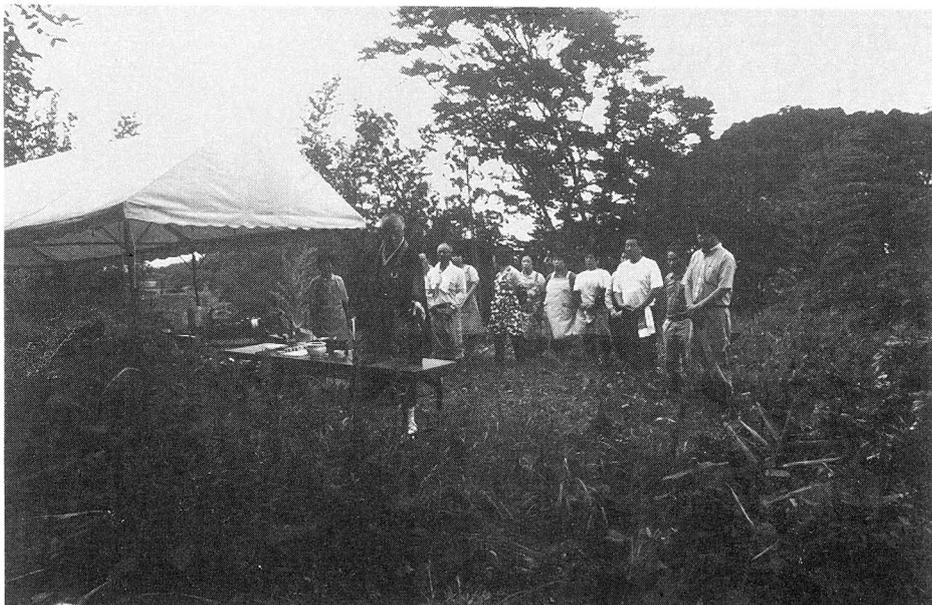
これらから本古墳群は、本域の古墳時代後期の首長墓と考える。埋葬施設の有無は当然それなりの事情が存在したと思われ、それが何かは不明である。永遠の謎であろう。（了）



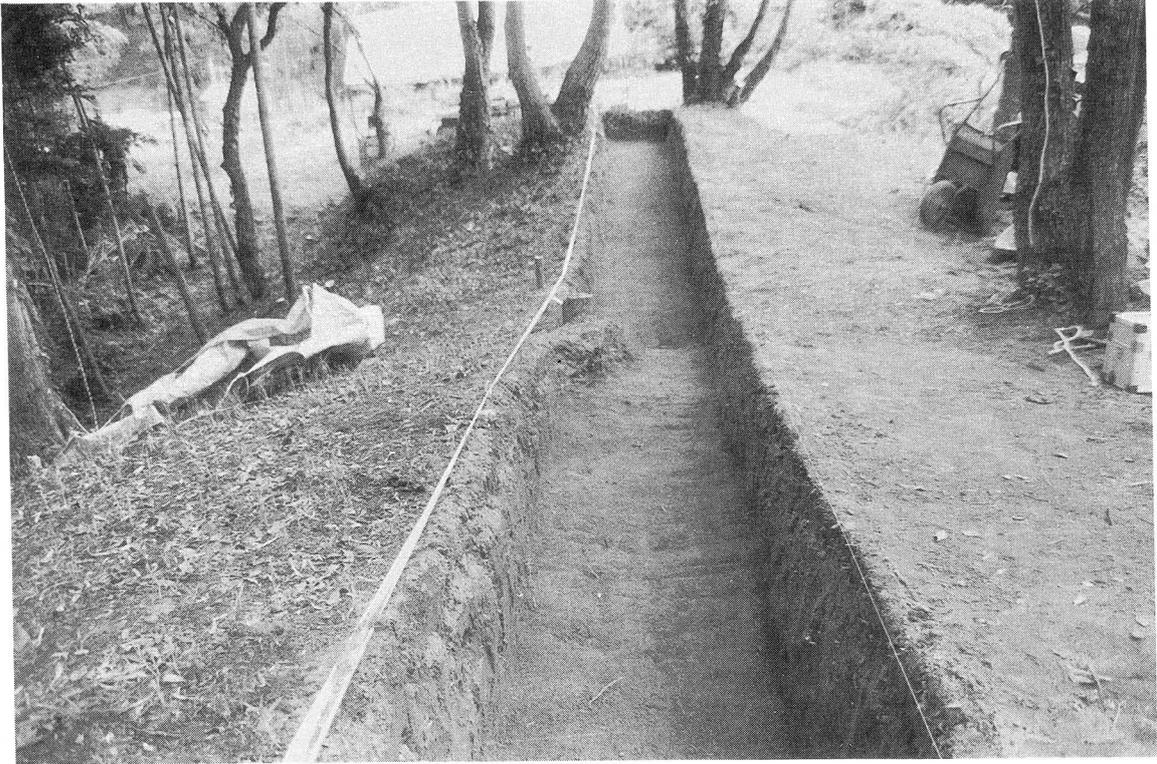
古墳からの遠望



遺存状態



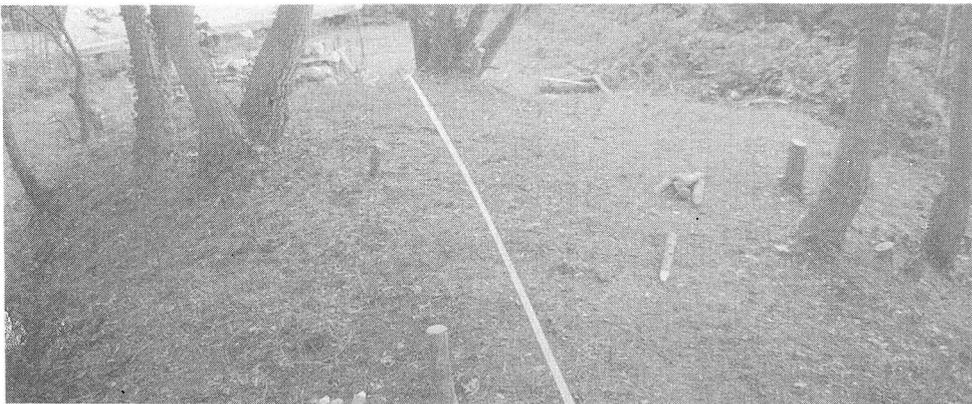
調査前のお祓い



中央トレンチ

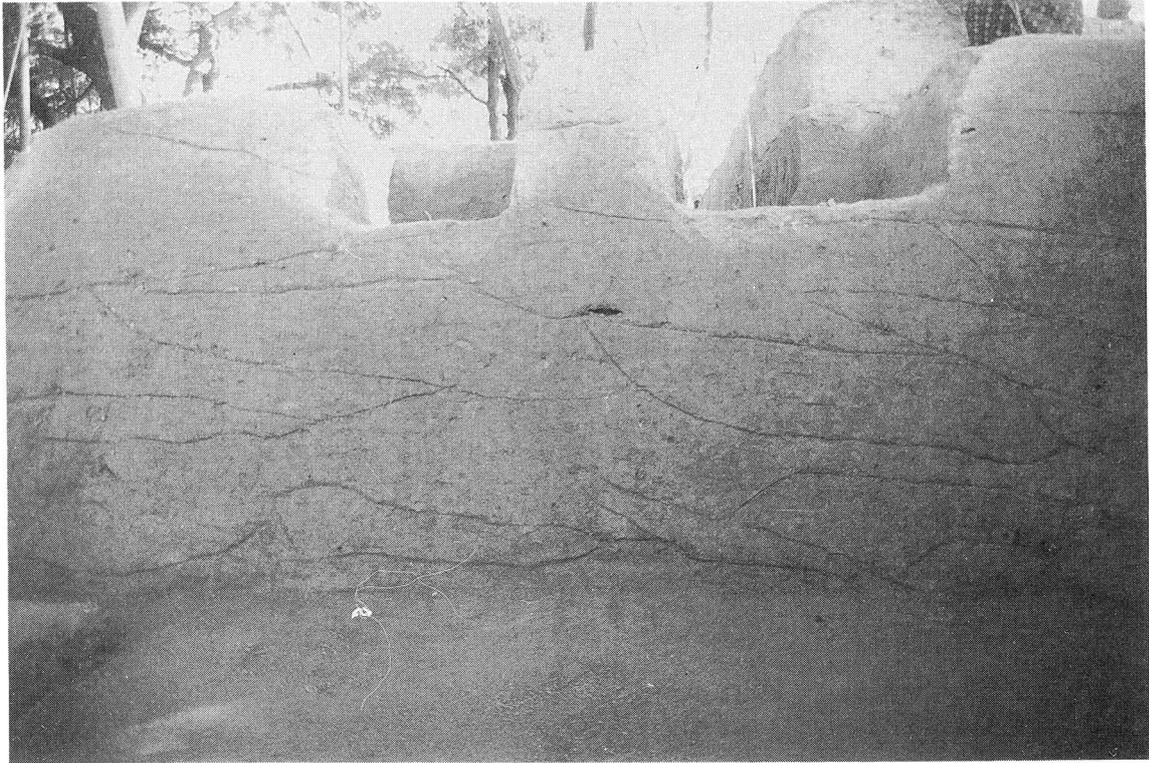


後円部状態

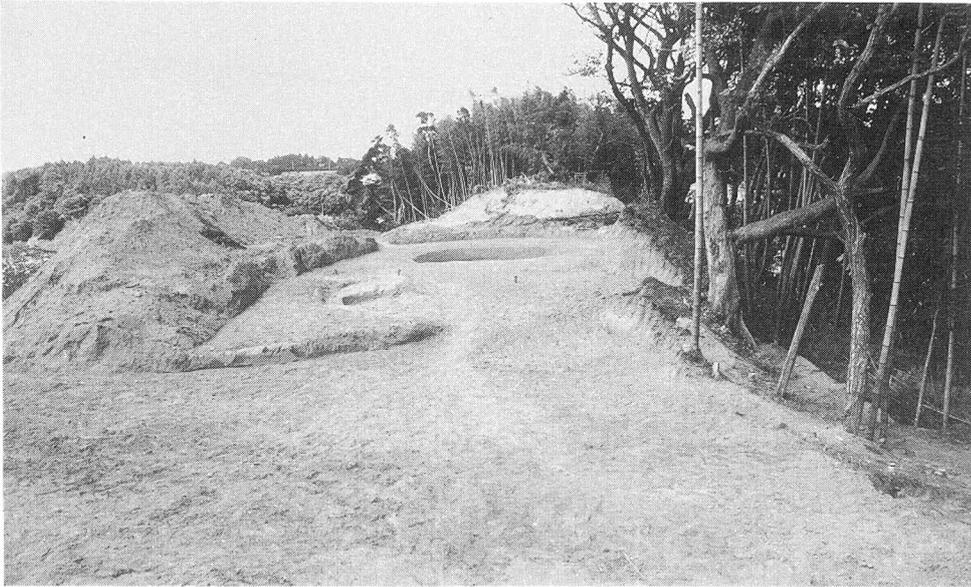


前方部状態

PL-2 祭祀儀礼、中央トレンチ（上）後円部（中）前方部（下）



PL-3 墳頂部土層、トレンチ土層



調査終了と土坑状遺構

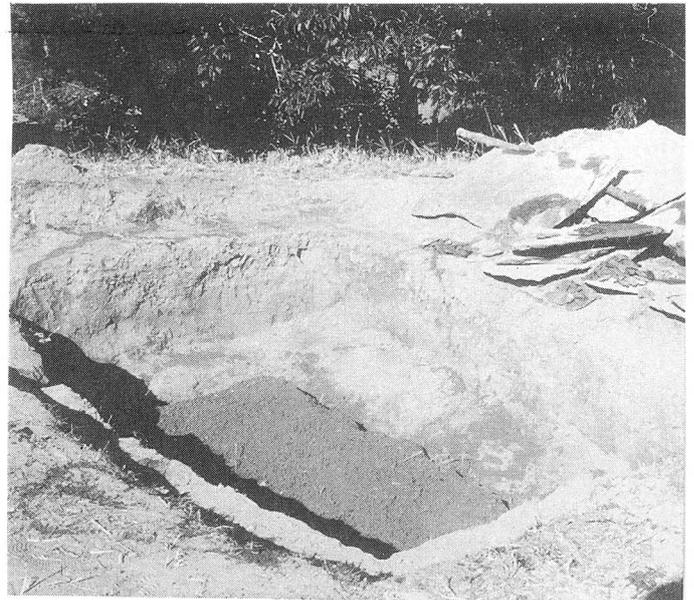


くびれ部の状態

埋葬施設とトレンチ



埋葬施設 掘り方





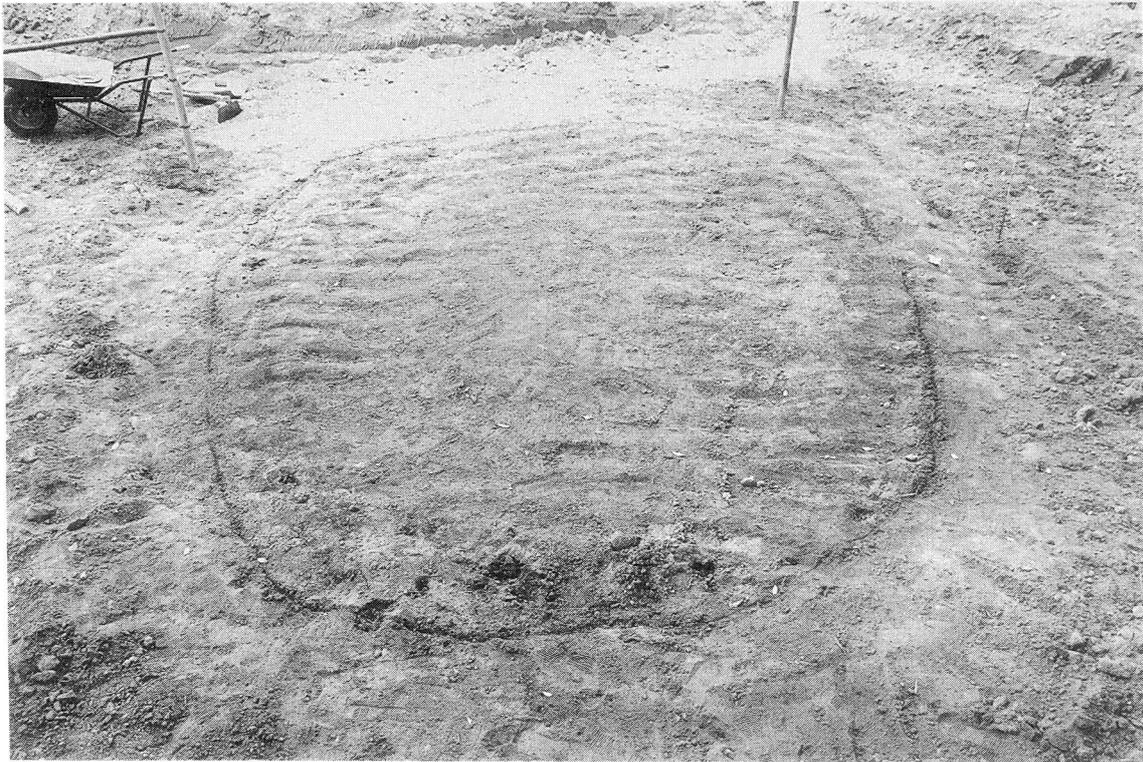
P L - 5 2号墳埋葬施設確認状態、蓋石投げ込み状態



PL-6 蓋石投げ込み状態



PL-7 蓋石投げ込み状態、底石と掘り方プランと土層



PL-8 墳丘下の土坑状遺構と土層

下り古墳群(1・2号墳)
発掘調査報告書

1999年10月

編集 鹿行文化研究所 汀 安衛
鹿嶋市青塚690

発行 麻生町遺跡調査会
麻生町麻生1561-9

印刷 久保田印刷
麻生町四鹿963-20